

## 特ラ機構 第24回技術賞表彰式

取材：編集部

一般社団法人「特定ラジオマイク運用調整機構(特ラ機構)」の第24回技術賞授賞式が、これまでの中野サンプラザから西武池袋線「池袋」駅南口前にオープンしたTKPガーデンシティPREMIUM池袋4Fの、バンケットCに会場を移して行われました。



技術賞の楯と「八幡賞」のクリスタルトロフィー(中央)

冒頭、渡邊邦男理事長から、平成12年に「功績賞」としてスタート、第1回の運用功績賞には、かつてない多チャンネルでの運用を成功させた帝国劇場の『レ・ミゼラブル』などが選ばれたこと。平成26年の第14回からは「技術賞」と名を改め、同時に初代理事長である八幡泰彦氏の功績を称えて『八幡賞』を創設したことなど、賞の歴史の紹介と挨拶がありました。



授賞式風景

## 《学生部門》

### ○奨励賞：

#### 岡嶋 慧(日本大学藝術学部 放送学科)

「日芸祭2023」スタジオ企画

『#神デートなうに使っていいよ』

受賞者コメント「サークルのような団体で、50人ほどで生配信も行う生番組を制作。音声は1～3年生10名で担当した。使用できるA帯の電波数が12波と少なく、B帯も3波使用した。短い時間でのピンマイクの付けかえが大変だった。」(岡嶋氏)

### ○銀 賞：

#### 東放学園専門学校

『青にまたたく』

受賞者代理コメント「年々技術が向上するよう対策しながら指導しているので、このように評価して頂けたのはうれしい。学内で作品を見る機会は残念ながらないが、携わった学生も関わった教師も、自分たちの作った作品を他の人に見て頂いて励みになると思う。」(原澤匠氏)

### ○金 賞：

#### 放送芸術学院専門学校

ミュージカル「Hospital Of Miracle」

2ndシーズン

『さよならの唄』

受賞者コメント「昨年11月に行った1stの第2弾。ワイヤレスマイクの付けかえが多く、短時間でこなすのは大変だった。4日間、舞台上で稽古や本番をやったが、電池がムダにならないよう、使用量を管理しながら運用した。音響は20名程度。役割は話し合っただけで全員が納得して行った。卒業公演だが、下級生にも手伝ってもらうことで、技術が受け継がれて行くと思う。」(中川優希氏)

### ○金 賞：

#### 渡邊 響己(日本大学藝術学部 映画学科 4年)

『ボウル ミーツ ガール』

※「八幡賞」に記載します。

## 《一般部門》

### ○奨励賞：

#### かやの木芸術舞踊学園

『あららぎは谷を越えてゆく』

受賞者は欠席。2023年10月15日に岐阜県土岐市の土岐市文化プラザで公演されたミュージカル作品。断片的に映像が紹介されたが、太鼓を含む多彩な楽器や、多人数でのコーラスが非常にきれいに収録されていたのが印象的だった。

### ○銀 賞：

#### 佐藤 日出夫(株式会社エス・シー・アライアンス)

『エウリディケ』(作：サラ・ルール/ミックソーンほか制作)

受賞者代理コメント「TiMaxの音声トラックと、d&bのSoundscapeを使用した。イマーシブオーディオの音像定位システムは大変優れたシステムだが、問題点もあり、音楽に関しては精確な音像定位ができるがヴォイスに関しては、例えば上手で聞いていると、上手のスピーカからばかり聞こえて来るのが不満。

われわれエンタメのPAの仕事は、まずは話していることをしっかり聞かせることが一番で、音像定位が先



代理で挨拶された松木哲志氏

に来るのは問題。ここでは、通常のLCRでのSRと組み合わせることで、セリフの明瞭度を上げながら音像定位もさせるという新たな可能性が追求できた。」(松木哲志氏)

### ○銀 賞：

#### 田園交響ホール&田園交響ホール ステージオペレーター クラブ

丹波篠山市民ミュージカル第11弾  
『ノートル＝ダム・ド・パリ～愛と宿命の物語～』

受賞者コメント「全体で4万人いない市で、隔年での市民ミュージカル公演を20数年間続けて来た。すべて募集で70名ほどの出演者が集まり、そのうち10数人は中心メンバーとして毎回参加してくれている。地方のために、プロの技術者が呼べない。その代わりにアマチュアの技術者を養成してお

り、隔年で行うことで技術向上が図られている」(山内伸広氏・小林純一氏)

### ○八幡賞：

#### 渡邊 響己(日本大学藝術学部 映画学科 4年)

『ボウル ミーツ ガール』

受賞者は残念ながら欠席だったので、代わりにコメントが読み上げられた。

受賞者コメント「本作は、20分の中に物語の展開がこれでもかと詰め込まれている。わかりやすくするために、物語上重要なシーンの会話は、やや強調されたものになっている。長廻しのワンカットの中で複数人が会話をする場面も多く、ガンマイク以上に、ピンマイクが重要な作品でもあった。至らぬところも多々ある作品だが、このような賞を頂けたのは、自身や監督、当時のスタッフの努力の賜物かと思う。」(渡邊氏)



渡邊理事長(前列左から2人目)と受賞者の皆さん